

P09

加齢による口腔機能の発達と低下に関する臨床研究

○大野慧太郎, 藤田優子, 大野陽真,
竹島朋宏*, 大野秀夫**, 牧 憲司

(九歯大・小児歯, *たけしま歯科・小児歯科,
**おおの小児矯正歯科)

【目的】

口腔機能は、学童期に獲得され、成人期を過ぎた後、低下していくといわれている。しかし、口腔機能とは、咬合、咀嚼、嚥下など様々な機能の統合のうえに成り立つものであり、支え合う要因も複雑に関連し合っている。我々は、それぞれの口腔機能の発達、低下の様式は異なるという仮説を立て、幼児期から老年期にかけて、口腔機能の客観的評価を行うとともに、加齢による口腔機能の推移と低下の要因を明らかにすることにした。

【対象と方法】

5歳から79歳までの身体的に健康な男女248名を対象とし、年代別に、5-9、10-19、20-29、30-39、40-49、50-59、60-69、70-79の8群に分けた。全対象者に身体測定、口腔内診査、最大咬合圧、咀嚼能力測定、嚥下閾値検査(咀嚼回数、咀嚼時間、グルコース濃度)を行った。男女別に群間内での比較を行ったあと、年齢による機能の推移について解析を行った。最大咬合圧、咀嚼能力について、20歳以上の対象者の下位20パーセンタイルを低筋力または低機能群とし、正常群と各測定項目の比較を行った。

【結果】

握力は、男性は、30代以降年齢とともに低下したが、女性は、20代から70代まで変動はみられなかった。最大咬合圧は、男性の場合、30代から50代までピークが維持されていたが、以降は急激な低下を示し、女性では、20代をピークにその後ゆるやかな低下傾向を示し、70代で急激に低下した。咀嚼能力の最高値は、男女とも20代で、以降低下傾向を示した。低筋力、低機能群は、正常群に比べて機能歯数、握力が有意に低値を、DMFT indexが有意に高値を示した。

【考察】

加齢による最大咬合圧や咀嚼能力の低下は、握力と関連性があるものの、機能歯数、齶蝕経験歯数の影響も同時に反映される可能性が示唆された。

P10

当院における歯垢染色液に関する調査

○濱崎千秋、囲美里、太田由美

たかかぜ歯科

【目的】

当院では、プラークの付着状態がよく分かるよう歯垢染色液を使用している。多くの歯垢染色液が販売されているが、使用感についての情報はない。そこで、一般的に使用頻度が高い(業者調べ)液状5種類の特徴を調査することで、保健指導および歯面清掃に役立てたいと考える。

【方法】

5歳から15歳までの小児250名(1種類50名)を対象に歯科衛生士10名が調査を行った。染め出しは上顎6前歯唇側のみとし、調査項目は①染め出し力②操作性③染め出し時の軟組織への作用とした。

①染め出し力はプラークの80%が染まると明瞭、それ以下を不明瞭とした。②操作性は染色液を含んだ6mm綿球を歯面に押し当てて3歯に広がると広がりやすい、それ以下を広がりにくいとした。③軟組織への作用について、味覚不快感と刺激性は患者に問診し、粘膜への残留度については、歯頸部歯肉が着色するものはあり、着色しないものをなしとした。

【結果と考察】

染め出し力と軟組織への色素残留度は、ばらつきが多かった。操作性は5種類とも良好であった。味覚不快感については40%の患者さんが不快と訴えたものがあつた。軟組織刺激性はほぼなかった。調査の結果、歯垢染色液によって、プラークの染色力に差があることや、味の不快感があるもの、色素の除去に時間がかかるものがあることがわかつた。歯垢染色液にはそれぞれ特徴があるので、この調査結果を診療に役立てたい。